諸聖徒日礼拝　　世界はハーモニー　　２０２３．１０．２９．
（延岡は１１．５．）

もうだいぶ前の話ですが、NHK みんなの歌で、「世界はハーモニー」という歌を、サーカスというグループが歌っていたことがありました。驚いたのは、最初の２行です。

「なぜ咲いている花　すぐに枯れてくの。明日（あした）ひらく花のためだよ。」
「ねぇ　命あるものがみんな、手をつなぐ　世界はハーモニー」
花のはかない命が終るのは、次の花を咲けるようにするためだ、というわけですね。これが、何を言おうとしているのか、十分には理解できませんでしたが、歌詞の全体を見てゆくと、世界に存在しているものには、それぞれつながりがあることを、歌っています。

私たちが、未だ死にたくない、と思いながらも、この世を去ってゆくのは、次の世代が幸福にこの世を生きるためだ、みたいなつながりを、示されているように思えたのです。そして、私たちが、現在生きているのも、今は亡くなった多くの人の過去の功績の上に存在しているということでしょうか。

さて今日は、諸聖徒日礼拝を守っています。礼拝の中で、この教会にゆかりの逝去者たちの名前を挙げて、祈ることになっています。それは、ただ、昔の人々をなつかしむ、ということではなくて、現在この世で生きているわたしたちだけでなく、天に召された人々も、毎週共に礼拝しているんだ、ということを、特にこの諸聖徒日には、憶えておきたいからです。

みなさんは、こんな話を聞いたことはありませんか。
教会というのは、三階建てである、ということです。

１階は、この世に生きているクリスチャンの教会です。この世には、悪魔の力が強く働いているので、それと戦わなければならない。この世の教会、１階の教会は「戦う教会」というふうに教えられていました。

それでは、２階はどんな教会でしょう。「待ち望む教会」「希望の教会」などと言っていました。この世での生涯を終えたクリスチャンは、地獄へ落ちることはないけど、完全な者でもないので、「天国」でも「地獄」でもない、「煉獄」という、清められるための場所。まあ、病院みたいなところで、やがて、天国に入れられるのを待っている場所、というふうに考えられていました。

そして、３階は、「凱旋の教会」「勝利の教会」というふうに言われて、「天国」を指していました。キリスト教の信仰のために、殉教した人など、立派な人は、２階の病院のような煉獄は通過して、すぐに天国へ入ったのだ、と信じられていました。

諸聖徒日という言い方をしていますが、元々は、１１月１日を、３階に住む人々、地上から、途中下車しないで、天国にまっすぐ入っていった「聖人」と呼ばれる人々のことをまとめて、お祝いする目的で設定されていました。そして、その翌日、１１月２日を「諸魂日」と呼んで、２階に住んでいる、天国に入るのを待っている、希望の教会の人々のことを覚えて祈る日、というふうに考えられていました。

ところが、宗教改革の時、「煉獄」というのは、聖書的に間違っている、ということになりまして、聖公会では、１１月１日を、聖人だけでなく、全てのクリスチャン逝去者のことを記念する日、ということになり、翌日の「諸魂日」は、他の宗教の人を含めて、すべての逝去者のことを祈る日、と理解するようになりました。

朝の礼拝などで唱える、使徒信経の終わりの方に「聖徒の交わり」という言葉が出てきますが、それは、現在１階にいる私たちと、２階か３階かわかりませんが、この世を去った人々との間にも、兄弟姉妹としての交わりがある、お互いに祈りあっている、ということなのです。

さて、そこで今日の福音書ということになるのですが、これは、山上の説教の冒頭の部分が選ばれています。「心の貧しい人々は、幸いである。天の国はその人たちのものである。」というところから始まるわけですが、この箇所を、私たち聖公会だけでなく、カトリックや、ルーテル教会でも、この全ての逝去者のために祈る日の福音書に選んでいます。

それは、伝統的に、３階の教会にいる、聖人と言われている人たち、天国にいる人たちは、どんな人たちなのか、ということを私たちが理解するためです。

この説明をする前に、ルカによる福音書１８章に出てくる、皆さんよくご存じの「ファリサイ派の人と徴税人」のたとえの話をしたい。この二人はともにエルサレムの神殿に行って祈りました。ファリサイ派の人は、「自分は罪を犯さないし、この徴税人のようでもない、週に２回断食し、収入の十分の一を献げています。」と威張っています。この高慢な人の祈りには、私たちは、耳障りな、気持ちの悪さを感じます。

しかし、どうでしょうか。私たちが目指している教会、というのは、知らず知らずのうちに、このようなファリサイ派の人たちの集団になってくれたらいい、という風に、わたしたち自身が考えてしまってはいないでしょうか。週二回の断食とは言わなくても、週に１回の礼拝には来る信徒であってほしい、とか、沢山の献金をする信徒であってほしい、とか。そうなれば、教会の会計は助かるし、「うちの教会は、大勢の信徒で礼拝しています。」と教区会などで威張れます。しかし、それでは、いつの間にか、私たちは、「自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々」という、イエス様が批判されたファリサイ派のような者になってしまうのです。そのような教会になるために、私たちは祈っているのではありません。私たちが祈るのは、神様に近づき、神様の心に触れるためです。それは、この世で最も小さい者に対する優しさであって、劣ったものを見下すことではないのです。

さて、今日の福音書に戻りますが、ここには、天国に入った、本当の幸せを味わう人はどんな人たちなのかが、書かれています。

人間はだれも幸福になりたいのですが、本当の幸せは、富や財産、名誉や地位、権力などによっては、決して得られるものではないのです。ここに書き出された幸いな人たち、というのは、イエス様の生き方そのものであって、その生き方を、自分の生き方として最後まで生き抜いた人たち、聖人たちのことを語っているのです。

イエス様は、ただ神様にのみ、拠り頼み、自らへりくだって生きた、心の貧しい人でした。友人ラザロの死をいたみ、その姉妹マルタとマリアと共に、悲しみの涙を流されました。人々から除け者にされ、軽蔑されていたザアカイの友達になった柔和な人でした。貧しいやもめや弱い人をいじめる者たちを非難して、神様の正義を追求する人でした。罪を犯した女性の過去を赦して、彼女を励ますような、憐れみ深い方でした。嘘を言わず、清い心を持っていました。この世に平和をもたらすために、命をささげました。そして、敵の手に渡され、十字架の苦しみを受けられたのです。

山上の説教の冒頭の８つの幸せは、イエス様の生き方そのものを語っているのです。そして、その生き方にならって、最後まで従っていった人こそが幸いなんだ、と福音書を書いた人は言いたいのです。

聖人と言いますと、私たちとは異なった、特別な才能を持った人と感じてしまいますが、どの聖人も、わたしたちと同じように、弱さとか欠点、短所を抱えた普通の人でした。しかし、彼らは、自分の貧しさということを知っていました。何も自分には誇るものがない。ただ、神様の慈しみと憐れみにすがって生きるしかない、ということを誰よりもよく自覚していたのです。そのような弱い者に、神様の力は働くのだ、ということを多くの聖人が教えてくれているのです。

私たちは、過去に生きた、信仰の先輩たちとの、イエス様を通しての交わり、その祈りの中で、自分を誇るための力を得るのではなく、人々の痛みに共感し、優しく受け止められる人間になりたい。イエス様のように、傷つきながら、他の人々と共に歩めるクリスチャンに、そしてそのような教会に成長したいものだと思います。